

であい

蜜瀬かえで 著

——朝。

夜のまだ肌寒い空気も、春霞の空にゆっくりと溶けだしてきた頃合い。

部屋に射し込んでくる透明な日射しの中で、あたしは素足も軽やかに朝の準備を進めていた。

今日は、待ちに待った入学式。

そして、記念すべきあたしの一人暮らし第一日目でもある。

父親の海外転勤が決まって、母親はそれについていくことになったけど、あたしは一人、この家に残って、今日から新しく地元の女子校に通うことになってる。

娘一人を残していくことに、もちろん最初は反対もされた。けど、あたしの志望校と、あたし自身の”実績”もあつたし、入試も推薦ですんなり決まったおかげで、渋々にだけど、認めてくれることになったのだ。

ただ——あたしが入るのが、二人がそうだと思ひこんでる音楽科のほうじゃなくて、同じ芸術系でも美術科のほうだってバレたりしてたら、あたしも強制連行は間違いなしだった。

それでも何とかバレずに昨日を迎えることができて、今頃は二人と

もどこか遠くの空の下。

それを思つて、あたしは鏡の前でほくそ笑む。

なんたつて、口やかましい母さんがいなくなったおかげで、これからはもう、何も隠さなくていいし、全部あたしの好きにできる。

そう。これまでずっとガマンしてたオシャレだって、今日からはあたしのしたいようにできるんだ。

鏡の前でくるとターンしてみせると、腰までの明るい色の髪がすうっと翻った。

昨日、両親が旅立つてからあたしがまず最初にしたことは、美容室に行つて髪を染めることだった。

うちの母さんは昔ながらの古くさい人で、「若いうちから髪を染めるのは不良のやることです」なんて、絶対許してくれなかった。だから、二人がいなくなったら、まず絶対髪を染めるんだって、予約もずっと前からこつそり入れておいたのだ。

なのでこの髪は、初めての自由を手に入れたあたしの新しい第一歩の証だったりする。

染めるついでに緩くパーマもかけてもらったりして、ちよつとくせつ毛なカンジがすごく新鮮だった。

そしてその髪を、秘密の引き出しから取り出したリボンで結ぶ。

あたしの机で唯一鍵のかけられる引き出しには、内緒で集めたあたしの”とつておき”がいっぱい詰まつて、どれも両親がいたころは

許してもらえなかった秘蔵っ子たちばかり。

今日選んだのは、淡いピンク地にレースの付いた春っぽい色合いのリボン。

今の髪色にも相性ばっちりのやつだ。

鏡を見ながら、頭の左右に一房ずつ。

確かこういうときって、結んでないもう片方のリボンは、唇にくわえておく作法だっけ？

で、お次は、

「こっちじゃなくて、こっち」

新しい制服は、紺をベースにしたブレザータイプ。下はブラウスで、首もとにはタイ。タイの色は学年を表してて、今年の一年は燕脂だった。

ホントだったらブレザーを着るところを、あたしはあえて昨日の帰りに買ったパーカーに腕を通す。

濃いピンクを中心にして、黒でアクセントがついている少し派手めのやつだけど、こっちのほうがタイがワンポイントに利いてくる感じだ。

それから少し悩んで、思い切ってスカート丈も、ほんの少し短くしてみた。

慣れない感じでちょっと心許ないけど、ちょうどに膝丈とか、ありえないし。

あと、ソックスは白と黒のどっちかじゃないといけないらしいので、もちろん黒。

そして、缶バッジ。

前の学校で同級生がカバンとか上着とかにいっぱい付けてるのを見て、あたしもずっとやってみたかったのを、今日初めてやってみる。

引き出しから取り出したニコちゃんマークを眺めて、頬がゆるんだ。上着に3つ。

残りはカバンにジャラジャラジャラ。

「ふふふ」

ついでにとつときのキーホルダーもジャラジャラジャラ。

なんか、中身も入ってないのに重くなっちゃったけど、問題なしっ。

「仕上げは、コレ」

引き出しの一番奥から出したのはさくらんぼの香りのリップ。

買ったときからのお気に入りです、これまでは自分の部屋の中だけでこっそりつけてただけだったんだけど、

「んふふ。今日からは堂々と付けてもいいんだよね」

唇にそっと乗せると、ほんの薄くだけ唇が桜色に染まって、軽く噛みしめると、うん、綺麗に艶が出た。

さくらんぼの仄かな香りが鼻に届いてくるのが少しくすぐったい。よしっ。

「——カン、ペキ」

鏡に映る自分の姿に、あたしは会心の笑みを漏らした。

一回くるっと回ってみて、せっかくなので、キメポーズ。

「——うん。うん！ コレだよ、コレ。コレがずっとなりたかったあたし！」

ほんと、夢みたい。

こういうカッコ、母さんに見つかった日には、すぐにひっぱたかれて、お説教だ。

あのひと、ほんと頭堅いんだから。

そのせいであたしは、これまでずうっと清楚系キャラを貫き通さなきゃならなかったし。

こっちのほうがダンゼンかわいいと思うんだけどなあ。

（昨日だって、早速「かわいいね」って言ってもらえたし——）

美容室の帰りに同い年くらいの子から褒めてもらえたことを思い出して、また頬がゆるんだ。

今日は昨日よりもカンペキだし、きつともっといろんな人から「かわいい」って言ってもらえるはず。

想像すると、頬のゆるみが止まなくなってくる。

——とはいえ。

この用意だけでたっぷり一時間もかかってしまっていた。

さすがにそろそろ家を出ないと入学式に遅刻してしまう時間だ。

ホントは登校前にお隣のみっちゃんにも見せに行くつもりだったん

だけど……。

『みっちゃん』っていうのはお隣に住んで一つ年上の幼なじみのお姉さんで、あたしがこれから通う学校の普通科に通ってる。

あたしが日本に残ることを許してもらえた理由の一つも「みっちゃんがいるから」だったりするんだけど。

「まー、あとでもいつか」

どうせ学校へ行けば会えるんだし。

髪を染めたこともまだ話してないから、きつとみっちゃんも驚くだろう。

その顔を想像してまたにやけながら、最後にもう一回、鏡の前でくるっと回ってから部屋を出た。

「それじゃ、いつてきまーすっ」

いつもより大きな声で玄関を飛び出した。

誰もいないせいとか、家中にあたしの声が響く。それがなんか不思議な感じだった。

門の庇の向こうに見える空は、絵の具で塗ったみたいなきれいな水色で、霞がかかった雲が薄く流れていく。

「——なんか、今日は絶対いいことありそうっ」

気分を高潮に、思わず駆けだしたあたしの足取りは軽やかだった。

「……………」

「——ん、もうちょっとだけお醤油かな」

味見の結果、クツクツ煮える鍋の中へお醤油をほんの少しだけ足してみる。

「……………」

「——ん？ まだ足りてない？ ……じゃなくてこっちか」

そうやって、次は少し多めにお出汁を加え、

「……………」

「——よし。これで完成っ」

お料理研究会、本日の課題はじゃが芋の煮物。

目の前のお鍋の中では、湯気の中で透き通るような出汁に、黄金色に染まったお芋がホクホクと転がっている。

——うん。今日はよくできた方かな。

会心の出来に思わず頬を緩めながら火を止めると、

「……やっぱり。あなたしかいないようね」

「あの……部長、どうしたんですか？ さつきから、ずっとそんなふ

うに」

いつもにこやかな部長だけど、今日は部活にやってきたときからずつと難しい顔で、何か悩んでいる様子だった。

わたしがお芋を煮ている間も、真剣な顔でじー、と見られて、ちよつと落ち着かなかったし、そうかといえど時たま窓の外なんかをちらちら気にしたりして……。

「みゅーちゃんっ！」

「はいっ！」

いきなり両肩をがっしり掴まれて、わたしも思わず背筋が伸びた。

まっすぐわたしの目を見据える部長の顔は真剣で、その分、理由がよくわかってないわたしのほうは若干引き気味。

「本っ当に、迷ったわ。あなたにこんなこと頼むような義理でもないことは重々承知なのだけど。でもやっぱりあなたしか頼める人が……いえ、違うわね。あなたにしか頼めないことがあるの！」

「……え、えーと。部長？」

そうしてたじたじになっているわたしに、部長はどうとう両手を合わせて頭まで下げてしまう。

「お願いっ！ あなたにどおーしても、かまってもらいたい子がいるの！」

「……へ？」

そんなわけでわたしはいま、人気の少なくなった放課後の校内を美術科のある棟へ向かって歩いている。

部長の言う「かまってもらいたい子」っていうのは、うちの美術科の新入生らしい。

「家が隣で、昔からちよくちよく気にかけるようにはしてたんだけど……」

どうやらその子は先月の入学式で派手に失敗しちゃったらしくて、一ヶ月経ったいまでも周りとうまくとけ込むことができてないらしい。「頭は悪い子じゃないのよ。むしろ、良い方で、天才肌？　なんだけど……ほんとおーーーーーに、おバカなのよ」

いつも朗らかな部長が頭を抱えてため息を吐く姿というのも珍しいので、多分よっぽどなんだろうと思う。

「でも美術科って……わたし、普通科ですよ？」

わたしがそんな風に確認をとったのは、うちの校風に原因がある。うちの学校——私立梅之恵学園は、普通科の他にも芸術コースとして、美術科と音楽科を併設している。

お金のかかる私立の芸術系なので、そっちに通っている子っていうのは基本的に近隣のお嬢様が多い。あとは本気で美術・音楽をやりたいって子たち。

逆に、普通科っていうのは、大した特色があるわけじゃなくて、大抵はわたしみたいに家が近いからっていう理由で選んだ子なので、そ

ういう意識の差もあって、どうも低く見られがちっていうか、軽く見なされがちっていうか……。

「大丈夫。あの子はそういうの全っ然っ気にしないから」

「い、いえ、その子がどうこうっていうんじゃないんですけど……」

「むしろ、みゅーちゃんから会いに行けば、もう小踊りして喜ぶくらいだから」

「そこまで熱烈歓迎されるわたしって、一体……」

おネギでも背負ってけばいいんだろうかと、一瞬想像したけど、よく考えてみたら、うちに帰るときはいつもそんな感じだった。

「あと、はいコレ」

そして手渡されたタッパーには、いましがたわたしが作ったばかりの煮物が詰められている。

「え？」

「これを持っていったら、きつとすぐ打ち解けられるはずよ」

「やっぱり、おネギ背負って餌付けしろってことなんですね……」

わたしがため息混じりに言うのと、

「やだもうっ。餌付けならとくにすんでるわよ」

「え？　それってどういう……」

「それじゃあ、お願いねっ」

それで打ち合わせは終了とばかりに、最後は有無を言わせない笑顔で家庭科教室を見送られたのでした。

なんかうまく言いくるめられたような気がしないこともないなあ。
それでも、多少の不安があるとは言え、二人だけの部活で普段お世話になっている先輩の頼みごとだし。話を聞いた以上、その周りとうまく打ち解けられてない子、っていうのも気にかかる。
「でも、かまたって、具体的にはどうすればいいんだろう？」
「いまいち要領を得ない”お願い”に、首を傾げながらわたしはとてあえず美術科棟に向かったのです。」

美術科の教室は、授業が終わってから結構経っているのにまだ結構人が残っていた。
（ええっと、どの子なのかな……？）
部長は一目でわかるって言ってたんだけど……。
……一目ではわからなかったときはどうすれば……。
（もしかしてもう帰っちゃったのかな？）
放課後になってから大分経つし、教室に人は残ってるけど、その子はもう帰ってもおかしくはない。
しょうがないので、ちょうど教室から出てきた生徒に訊ねてみるこ

とにした。

「あの――」

「なに？ ……あなた、普通科の子？」

う、いきなり不審げな目で見られてしまった。

そうだね。普通科はこっちの棟まで来ることなんてほとんどないし……。

ちなみに普通科と美術科ではタイの形が違って、わたしが普通科だってことは、それを見ただけで分かってしまう。

多少口元ひきつらせながらも、わたしはできるだけよそいきの愛想笑いを浮かべた。

「このクラスの姫路玉置さんって……」

そして、その名前を出した瞬間、目の前の生徒は、わかりやすく嫌な顔をした。

「姫路さんなら、授業中にもう課題出して、どっか行っちゃったわ。カバンはあるからまだ構内にいるんじゃない？」

ちらつと背後の机を振り返ったところからすると、あの窓際のぽつんと1つはみ出しているのが目的の子の席らしい。

……姫路さん、本当わかりやすくクラスから浮いているみたい。

そのあと何人かに姫路さんのことを聞いてみたけど、返ってくる反応はどれも似たり寄ったりで、やっぱりあんまりいい印象もたれていない感じじゃなかった。

入学式の日によらかしちやったことも原因の一つみたいだったけど、それ以上に、普段の態度に問題があるみたいで、

「授業の課題はいつも授業のはじめに一人でさっさと終わらせちゃうし」

「それなのに毎回A判定もらってるしき」

「どうしたらそんな風にうまく描けるの？ って訊いても、『こんなのデキトー』とかいっちゃってさ」

「ぜったいカッコつけしいだよね」

「私たちのこと見下してんのよ」

「髪とか染めちやってるし」

「でも、先生には地毛だって言い張ってるらしいよ」

「あれが地毛なわけじゃないじゃん」

「見たらわかるよね」

「ねえ？」

「はーあ」

美術科の棟から出て、わたしはようやくため息をついた。

慣れないところを歩き回ったこともあるけど、やっぱりやだなあ、他人の陰口って聞くのって。

愛想笑いしすぎて口元がまだピクピクしている。

結局、お目当ての姫路さんの行方はわからないまま。家に帰ってないのはたしかみたいけど、どこにいるかは誰も知らなかった。

わかったのは、クラスの子たちからは揃って悪い印象をもたれてるってことだけ。

（どうしよう。気が重いなあ）

部長はお芋を差し入れすればすぐに仲良くなれるみたいなのを言っていたけど、あの話を聞くと、とてもじゃないけど仲良くなれる気がしない……。

なんか、孤高のエリートって感じがして近づきがたいっていうか。

ほんと、どんな子なんだろう、姫路さんって。

そんな風に考えながら、普通科の棟まで帰ってきたときだ。

（あれ？）

お料理研究会が活動している家庭科教室は、ちょうど普通科棟の一階にあるのだけど、ちょうどその窓の外、植え込みの陰に、しゃがみこむように座っている人影があった。

（なんだろう？ 気分とか悪くなったりしたのかな？）

気になったので一応確認のため、

「あのー、大丈夫ですか？」

「うえっ!？」

のぞきこむようにして声をかけたら、びっくりさせてしまったみたいで、その子——植え込みに隠れるみたいに座ってた女の子は、わたしの顔を見た途端、

「のわあああつ!」

こっちが面食らってしまうくらい、いきおいよく立ち上がった。

(……なんか失礼しちゃうわね)

しかもその子は、あわてたせいで抱えていたスケッチブックを地面に落としてしまう。

(スケッチブック……ということは、やっぱり美術科の子? でも、

この髪……)

あせって拾い上げようとするその子の髪は、全体に緩くパーマをあてたような明るい色のロングヘアで。それはさっき聴いた特徴とも一致する。

(……タイの色もおなじ新入生、ってことはもしかして)

「姫路、玉置さん？」

「——えっ、なんで、って、うわっ!？」

ビクッて音がしそうな感じで動きが固まって、それでまたひろいかけたスケッチブックを落としてしまう。

わたしはそれかわりに拾おうとして、

「だめっ!」

「え？」

よく見ると、落ちた拍子に開いてしまったページにいたのは、わたしのよく知ってる顔で、

「……これ、わたし？」

拾い上げて、よく見ても、明らかにわたしだった。

それに、この満足そうな会心の顔。

あ、これ多分、さっきお芋がいい感じで煮えたときの。料理するときの髪留めも今日のやつだし。

……というか、何コレ。すんごくうまい。

鉛筆だけで描いてあつて、描きこみもそんなに多い感じじゃないのに、そこに描かれているのはちゃんと”わたし”の顔になっている。

さすが美術科というか、噂通りの天才っていうか。

(……でも、なんでこんなところでこっそり?)

「もおっ! だからダメだつてっ!」

感心したら、正面から上に無理矢理ひたくられてしまった。

驚いたけど、

「ごめんね。美術科の姫路さんだね? やっぱり絵、すんごくうまいんだね」

「——え？」

「ん？」

「怒って、ない？」

「怒るって何を？ わたしそんな怒りっぽくないよ。あ、そだ、よかったらこれ、味見してみない？ わたしが部活で作ったやつなんだけど」

そう言って、ずっと持ち歩いてた煮物が入ったタッパーを差し出してみると、

「みゅーの煮物！ 食べる！」

その子——姫路さんは途端にすごくキラッキラした顔で身を乗り出してきた。

（なんだ。すごく素直なかわいい子じゃない）

美術科の子たちから聞いた話だと、もっとストイックな感じを想像していたんだけど。

先輩の言ってた通りのいい子じゃない。

多分、入学式でやらかしてしまったとかいうことと、この髪の毛のせいで誤解されてるだけなんじゃないかな。

これなら、きっとすぐに仲良くなれる。

でもまあ、一応、訂正は入れておかないとね。

『みゅー』じゃなくて、『ミウ』よ」

『ミウ』？」

「そ。『笹川未佑』。あなたは姫路玉置さんよね？」

「うん」

これまたうれしそうにうなずいてくれて、わたしも何だかうれしくなってくる。

部長から「お願い」なんて最初に言われたときはどうなるかと思っただけ。こういう子だったら、こっちから友達になつてくださって、お願いしたいくらい。

何でわたしの絵を描いてたのかはわかんないけど、わたしの名前も知ってるみたいだし、きっと部長がこの子のほうにもなにか手を回してたんじゃないかって思う。

まあ、そのあたりの話はいまからゆっくり聞けばいいとして、

「じゃあ、ちようどいいから中入って。手、汚れてるでしょ？ お芋もちよつと冷めっちゃってるの温め直すから。さっき作ったばかりでまだ味はしみてないけど、その分、お芋がホクホクしてて、その甘みがまたおいしいの」

「うん、知ってる」

満面の笑顔でうなずく姫路さん。

——ん？

知ってる？

一応確認のため、窓の向こう。家庭科教室の中に目を向ける。

二人きりの部活。部長はもう帰ってしまったみたいで、室内には誰もいないかった。

そして、わたしがつい先ほどまでお芋を煮ていたガス台にも何もない。

何も？

あれ？

わたしがいま持つてるタッパーには、お鍋の中の全部を移したわけじゃなくて、まだお鍋の中には結構な量残っていたから、うちの今晚のおかずにしよと思うってそのまま出てきたはずだけど……。

わたしが作ったのを部長がときどき持つて帰ることもよくあるけど、それにしたって、まるまる全部ってことはないし……。

そこで、今度は目線を下に向けた。

ちようどさつきまで姫路さんが座り込んでいた植え込みの陰あたり。なんか見慣れた真鍮色のお鍋が転がっているんだけど……。

フタも横に転がっていて、肝心のお鍋の中は……からっぽ。

「——ねえ。姫路さん」

「あたしも『玉置』でいいよ、未佑」

律儀にちゃんと、さつきわたしが教えたとおりに発音してくれるのは確かにうれしいので、微笑んでみたら、頬がひきつったのはどうしてかなー？

「じゃあ、玉置ー？」

「なに？」

「もしかしてあなた、わたしの作った煮物、もう食べちゃったりー、なんてはず……」

「うんっ！」

やっぱり、笑顔だ。だけど、さつきと違って、いまはその笑顔がすごく腹立たしくなってきたぞー。どうしてかしらねー。

「でも、未佑の作った料理なら、あたし大好きだからいくらでも食べられるよっ！」

「そお？　ならわたしががんばって作った甲斐があったわ。」

なんて、

言うわけないでしょっつっ！！！！」

「さっきは怒ってないって言ったくせに————いいいっ！」
駆けていく玉置が前のほうから叫ぶ。

「というか、さっきの「怒ってない？」ってそういう意味!？」

せっかく作った料理を断りもなく全部食べられて、怒らないはずないでしょ！ 普通！

と、こつちも叫んでやりたいのは山々だけど、

（なんで、全力で走りながら、あんな風に叫んでられるのよ……!）

わたしはただついていくだけでもういっぱいいいのなのに、玉置ときたら、時折振り返っては逆走りでわたしの様子をうかがってくるとか、

（……インドアな美術科のくせに、アウトドアも強いなんて、反則じゃないっ!）

普通科の裏手からスタートした追いかっこは、そのまま普通科棟をぐるっと回って、下駄箱の前を通り、いまは美術科棟との合間の目抜き通りを講堂のほうへ向かっている。

「待あちなさああああいっ!」

必死で声を出したら肺の中の空気が一気になくなって、ノドのあたりに鉄の味が混じった。

思わず立ち止まって、せきこんでしまう。

しかも、急に立ち止まったせいで、肺がドクドクいって、急に痛くなってきた。

こんなに走ったのって、体育のマラソン以来……。

しかも、マラソンと違ってずっと全力疾走だし。

大きく息を吸って肺に空気を送り込もうとしたら、引きつるみたいな痛みが走る。

それを我慢して、何度か繰り返すうちに段々とマシになってくるけど。

（わき腹、痛……）

うう。この間に玉置は、もうどこか逃げきってるわよね？

そう思って顔を上げたら、意外なことに道の先のほう。ちようどさつきまで走ってたとこにまだいる。

向こうも立ち止まっていて、心配そうな顔でこつちを見ている。

なんとか一歩、踏み出す。

そうしたら、一歩離れた。

また一歩踏み出せば。

また一歩離れる。

——ああ、もうっ。そうやって待ってるくらいなら、さっさと捕まりなさいよ！

いまならデコピン10回の刑くらいで許してあげるのにつ。

言いたいけど、ゼイゼイ息が漏れるだけで、言葉にならない。

しょうがなく、キツとにらみつけてやったら、一瞬、びっくりしたような顔をし、

「べー」

カチン。

もう、これは前言撤回だわ。

「素直ないい子」なんてとんでもない！

舌出して「あつかんべー」って、子供じゃないんだからっ！

「……たあまあきいゝゝゝゝゝゝゝゝっ！」

——結局。その日は玉置を捕まえられないまま、夕暮れまで校内を走り回るハメになった。

「うう……っ。あたしってば、なんでこんなにばかなんだろ……」

うちに帰ってきてすぐに、あたしは布団に倒れ込んで、いま絶賛大後悔時代真っ最中。

このまんまだと制服がシワになるとか、普段なら気にするトコだけど。

もうそんなのだって、どーだっていい……。

そんなことより。

そんなことよりも、だ。

やっとなんかにも未佑と話せたっていうのに、ほんと何やってのよお、あたし！

うあーって、布団に目一杯おでこ押しつけて、熱くなるまでぐりぐりすりつけると、

「……うー、ひりひりするよお」

自分でも何やってんのかよくわからないけど、いまはこういうふうにしてないと、何かあふれそうになってるから。

「……笹川、未佑」

『みゅー』じゃなくて、『みう』。

みっちゃんがいつも『みゅーちゃん』って呼んだから、あたしも勝手に『みゅー』って呼んでたけど、本当は『みう』だった。

次からは絶対に間違えない。

でも、いくらそう思っても、次なんてもうないっぽいだよね……。

絶対、ヤナ子だって思われたよね……。

後悔の波が、また大きく押し寄せてきて、あふれそうになって、上から枕で顔を布団にぎゅっと押しつけた。

……そもそも。

あたしったら、どうしておジャガをぜんぶ食べちゃったりなんかしたのよっ！

「だって、しょうがないじゃん……」

だって、ほんとしようがなかったんだもん。

いつもみたいに、こっそりお料理研を覗いてたら、未佑がいきなりあんなにもイイ顔するんだから。

これはもう描くしかないって、持ってたスケッチブックにその表情を描き出そうとしたんだけど。

どうしてもあの瞬間、未佑が何であんなイイ顔してたのか、そっこのほうが気になっちゃって。

それがわからないままだと、絵もなんとなく上手く描けない気がして……。

もう一度窓から覗いて、誰もいなくなってるのを確認してから、こっそりお鍋を拝借したのだ。

だけど。

『うーん？ たしかにおいしそうだけど……』

お鍋の中を見ても、それは見た目何の変哲もない普通のおジャガの煮っ転がしで。

だからそうなるともう味見してみるしかないじゃない？

あと、なんかすんごくいい匂いしてたし。

『一個くらい、いいよね』って。

思わず食べてしまったのだ。

そうしたら。

『おお！』

（たしかにこれはあんな顔もしたくなる！）

お隣のみっちゃんみたいにみんなが好きな濃ゆい感じじゃなくて、最低限の調味料だけでほんのり甘めの味付けがしてあって、けどその味自体もまだ完全にはしみてないから、お芋の中はまだ白いホクホクのままで、お芋そのまんまの柔らかい甘さが引き立ってる感じ。

これまで未佑の料理はみっちゃんに時々おすそわけをもらってたけど、これは今までで一番かもしれない。

はつきり言って、カンペキにあたし好みの味付け。

そのことが何だかすんごくうれしくて、

「なんだかんだ言いつつ、描いてる間、ずっとつまんじやってたんだよね……」

描き終わったときにも、無意識にお鍋の中に手を伸ばしてて、そのときになってようやく空だって気づいたときにはもう後の祭り。

なにが、一個だけ、よ！

そして、その最悪のタイミングで未佑に見つかっちゃって。

あんなのバレたら絶対怒られるに決まってるのに……。
しかも、勝手に絵描いてたことまでバレちゃって……。
未佑は、怒ってないって言うてくれたけど。

「そんなわけないじゃん！」

隠れて絵に描いてるなんて、嫌がられても全然おかしくないもん……。
…。

あたし絶対、未佑に気味の悪い子って、思われた……。

それなのに未佑は、そんなあたしを気さくに誘ってくれて。

多分みっちゃんも裏で手回してたんだろうけど、それでもあんなふうに話しかけてくれるなんて、全然思ってたから。

つつい謝るのも忘れるほど舞い上がっちゃって……。

「もう、あたしのほんとばかあつ」

みっちゃんにもこれまで繰り返しおばかと言われ続けていたけど、まさか自分でもここまでおばかとは思ってなかった。

すぐに謝ったら許してくれたかもしれないのに、思わず逃げ出しちゃったりなんかして……。

しかも、にらまれて、つい反射で、

「べー」なんて。小学生じゃあるまいし。

「ばかだあ。あたしってほんとばかだあ」

また布団に顔をぐりぐり押しつけて、ばかだ、ばかだと繰り返した。

(でも、未佑って、怒るときはあんな顔するんだ……)

で、極めつけにコレだ。

さんざん怒らせといて、それを後悔してる最中なのに、これまで見たことなかった新しい表情が見れたことをうれしく思ってしまった。
あたしがいる。

怒った顔もいいなあとか、

「うあああああつ」

これまで未佑のあんな顔見たことなかったから。

それに思わずうれしくなるのはしょうがなくて。

でも不謹慎だってわかってるから。

フタしたくて、自分のおばか加減を思い出して落ち込んでみるけど。
ど。

そのうちまたうれしくなってきたやつ。

それを延々繰り返した結果。

胸のあたりが、キューって息詰まりそうになって……。

「だあつ。ダメっ！ これもう、描くつきやない！」

このぐあいつてなってる感じは、もう描いて出す以外に治まる気がしない！

上手いかわいことや、思い通りにならないことがあると、あたしはそういうモヤモヤを全部絵に描きだしてきた。

だから今回も。今のこの気持ちを全部ぶつけられるような何かを描けば……、

ううん。違う。

描きたいんだ。

そうだ、いま、すつごく描きたいモチーフがある。

あのときのあの光景。

多分あれが頭に残ってるせいで、あたし、いまこんなにぐるぐるしてる。

「よしっ」

そうと決まれば。

バツと起きあがり、枕元に投げ出したままのスケッチブックを拾い上げる。

「描くぞおーーーーーっ！」

で、

……気づいたら朝になっていた。

「いきおいで、色まで完成させちゃったよ……」

ふああ。

朝日が、まぶしい。

でも、おかげで心のぐるぐるは、いまは全然気にならない。

眠気でごまかしてるだけの気がしないでもないけど……。

「というか、そろそろガッコーいかないと……」

気づけばHRにギリギリ間に合うか合わないかの時間だし。

このまま眠気に任せて倒れてしまいたいところだけど、授業をサボるとまたみっちゃんがるさいから。

けど、今日一日まともに起きてられるかなあ……。

ふああ。

一晚寝たらマシになるかと思ったけど、寝起き一番にあのあつかんべーを思い出したせいで、わたしは朝から大変ご立腹で、朝ご飯を二回もおかわりしてしまった。

結局、その怒りは放課後まで続いている。

（部活もないし、今日こそはあの子をとつちめてやらないと！）

部長から頼まれた件もあるけど、それよりあの子にちゃんと謝らせないことには、わたしの怒りとおジャガ達が報われない。

「見てなさいよーっ」

決意を込めつつ、カバンに教科書を積んでいると、

ピンポンパンポン

「普通科一年二組の笹川さん、普通科一年二組の笹川みゆさん、至急職員室に――」

パンポンピンポーン

……なんか、

すごく嫌な予感がするんですけど。

しかも名前、間違ってるし……。

昨日寝てないせいで、今日は一日中ずとぼんやりしたまま過ぎていった。

ただ、授業はどれも実習メインだったから、手を動かしていれば眠気はごまかせたけれど、課題が何で、自分が一体何を描いたのかすらもよく思い出せない。

……いいや、今日はもう帰って寝よう。

午後を過ぎたあたりから、もう、眠いのマックスだし。

そうやって、帰りの荷物をまとめ始めたところで、

「あれっ?? あたしスケブどこやったっけ？」

机にもロッカーにも、あたしが普段持ち歩いているほうスケッチブックが見あたらない。

どこやったんだろー、今日は移動教室もなかったしー、とぼんやりとした頭でおぼろげな記憶を辿っていくと、

（午前のデッサンで使ってたのは……多分、授業用の……だよな?）

（で、スケブ提出に出したのは、クロッキー用? うん。それもいま手元にななし、多分そう）

（けど、午後の絵画で使ってたのは、どっちだっけ……? もしかして、普段使ってる方? でもあの授業中の課題は、提出したときにペー

ージを破った感覚を憶えてるし……）

（んー、なんかまだ忘れてる気が……）

腕を組んで悩み始めたところで、まだ教室に残っていたクラスメイト達の声が自然と耳に入ってくる。

「ねえっ、夢ちゃんの課題、いっしょにやらない?」

「さっき出たやつ?」

「そうそう」

「ゴメンっ。それ、私、サチと約束しちゃってる」

「えー、うつそお、どうしよ。わたし、もうお母さんとかでいいかな

あゝ」

……夢ちゃんの課題？

夢ちゃんと言えば、うちの担任の夢村先生。絵画の授業担当の若い女の先生で、年が近い分、みんなから「夢ちゃん先生」って親しみを込めて呼ばれている、けど……

夢ちゃんの課題？

さっき出たやつ？

授業中のじゃなくて？

……………。

「ああああああっ！」

ヤバいつ、あたしあれ、間違って提出しちゃってる！

しかも、スケブ丸ごと！

マズいつ！

いや、テーマ的にはあれもアリかも知ないけど！

でも、やっぱマズいつ！

あのスケブには、タベのアレだけじゃなくて、これまで描き溜めて

きた未佑の絵がいっぱい入ってるっていうのに！

あんなの先生に見られたら……というかもし万が一にも未佑に見られたりなんかしたら！

「おー、ご本人様の登場だ」

職員室に入ったら、入り口に近い席で若い女の先生が会釈してくれて、奥の席からは別の女の先生が大きめの紙を片手にわたしをじろりと見据えてきた。

短めの髪。鋭い目つきに眼鏡。

着ている白衣には絵の具の染みがついているから、多分美術科の先生だろう。

嫌な予感が当たりそうだった。

「……ふむ。見事にこの通りの顔だな」

手に持った紙とわたしを見比べながらその先生がつぶやく。

「あのー、一体なんのご用ですか？」

「いや、なに。今日の提出物でちょっと採点に困るもんがあったんで、確認を、ね」

「採点って……」

「ん？ これだよ、これ」

そう言つて、持っていた紙——課題って言つてたから多分、絵をひよいとわたしに差し出してきた。

ひとの出した課題なんて、そんな勝手に見てもいいんだろうか、と思いつつ、目の前に出されたら、どうしても目に入ってしまう。

そこに描かれていたのは、彫刻のデッサンだった。

何の像なのかは知らないけど、むつかしい顔をした、いかにも古代ギリシャっていう感じの胸像。美術室なんかで見かけるブルータスとかアグリッパとかそういうの。

見た瞬間、こういうの描くのは、いかにも美術科だなあ、なんて、もう一度よく見たら、

わたしの顔だった。

「！？

！？！？ ……！？ ……！？」

思わず先生の顔と絵の間を何度も往復もしてしまつてゐるわたしに、

「こういうのもあるぞ」

人の悪い顔で次に手渡されたのは、色鉛筆か何かで淡く色が塗られた絵で、

「……」

おジャガを振りかぶつたわたしが走っていた。

ひきつり笑いで。

「一応主役は、小さいけどその芋な」

野菜画の課題なんだと、実物のお芋を目の前に置かれたけど、わたしはなんだか、イヤあな汗が止まらなくなってきた……。

「あと、これなんかは力作だ」

半分にやけながら今度はスケッチブックを渡して来るものだから、警戒しながら受け取つてみたけど。

「あれ？」

なんのことはない、ただの人物画だった。

顔や服が詳細に描いてある感じじゃなくて、全体の大まかな特徴を描いただけの——いわゆるクロッキー。

しかも、今度は描いてあるのが明らかにわたしじゃなくて、警戒してた分、拍子抜けつて言うか……。

「右下見てみ」

言われて、見ると、確かに何か小さく描いてあるけど。

「もしかして……」

1ページめくると、同じ位置にまた描きこみがあつた。

……その次のページにも。

スケッチブックの右下をつまんで、指で弾くようにしてめくつてみると、

「……パラパラマンガになつて……」

校内の目抜き通りとおぼしき道を画面奥から駆けてきたわたしが、手前のほうで息切れして立ち止まり、最後にはキツとにらみつけてくる。

「無駄にクオリティの高い……」

というか、さすがにここまでヒント出されたら、誰が描いたのかはイヤでもわかってしまうというか。

昨日も、なんか似たようなことあったし。

「……あのー、これ描いたのつてもしかして」

「ああ、うん。ご推察のとおり——」

「きゃっ！　って、姫路さん！？　なんでそんなところに……」

「ダメっ！　夢ちゃん、しーって！」

突然、入り口のほうで、驚くような声がしたと思って振り返ると、

「やばっ」

慌てて駆けていく見覚えのある明るい髪。

それを見た眼鏡の先生が、親指でクイツと指さした。

「アレだ」

やっぱり。

というか、せつかく見つけたのに、このままだとまた昨日みたいに逃げられちゃう！

何か、手近で使えるようなものは……何か、

……！

とっさにつかんだソレを、確認する間もなく、逃げ出す玉置めがけてわたしはおもいきり振りかぶる。

「——ぐぎゃっ！」

そうしたら、ソレは見事に玉置の後頭部を直撃。玉置はそのまま前のめりにつんのめって、顔面から床に転がっていった。

「よしっ！」

「……お前、意外と容赦ないな」

「え？」

指摘されて、

「……あ」

初めて気づく。

もしかして……あたしがいま玉置にぶつけたのって、さっきのおジ

ヤガ？

……うわ。

って、自分で引いてどうするのよ！

「玉置っ。玉置ったら！　大丈夫！？　血出てない！？　こぶできて

ない！？」

「きゅーっ」

「気絶してる！？　起きて！　ねえ、起きてったら！　玉置っ！」

慌てて駆け寄るわたしに対し、

眼鏡の先生は、一度玉置と手に持った絵を見比べて、

「夢ちゃんセンセ、この野菜画、Aでいいんじゃない？」
冷静にさっきのおジャガの絵に点数を付けていた。

「……」

すぐに目を覚ました玉置は、どこも怪我とかはしてなかったみたいで、わたしはほっと胸をなで下ろしたんだけど。

ただ、当の玉置はしゅんとうなだれてしまっていて。

わたしはそんな玉置を連れて、普通科棟まで戻ってきた。

逃げ出さないように、一応手を引いて歩いているけど、今は突然逃げ出すようなこともなさそうで、わたしも軽く手をつなぐくらいの力しか込めていない。

玉置の手は、わたしの手よりもひんやりとしていて、そういえば、こんなふうに同じ年くらいの子と手をつなぐことって今まで全然なかったなあ、とか思ったら、少し不思議な気持ちになった。

職員室で借りた鍵を使って、いつもの家庭科教室に入る。

「ほら、そんなトコに立ってないで、早く入っておいで」

戸を開けるときに手を放したときのまま、固まっている玉置を手招

きして、わたしの前に座らせる。

「……」

「もう、なんて顔してるの？ 昨日の元気はどこいったのよっ」
「っ!？」

ほんと情けない顔だったから、両手でほっぺを思いっきり引っぱってやった。

意外と張りのある頬で、伸びるというより、つねる感じになっちゃうけど、心は鬼にして。

「そんな顔してる間に、わたしに言うことがあるでしょ？」

「……ひうほほ？」

「そう。さ、ほら。ちゃんとごめんなさいする」

「……」

「ほおら。おジャガ全部食べちゃってごめんなさいって」

そしたら、なぜか今度はぼかんとした顔で見上げられてしまったけど、

「せっかくこれまでで一番良い感じに出来たのに、わたし、全然食べなかったんだから」

ぐいっと顔を近づけたら、視線を反らそうとしたので、目を見るためにもつと近づけた。

「さ、ほら」

「……ごめん、なさい」

「反省してる？」

「して、ます」

「じゃあ、ゆるす」

でも、最後にもう一度、思いっきり左右に引っぱってから、手を放した。

「もう。最初からそうしてちゃんと謝ってればすぐに許してあげたのに」

そう言ったわたしに、玉置は赤くなった頬をさすりながら、意外そうに、

「……それだけ？」

「ん？」

「それだけで、もう怒ってないの？」

「そだけど……あ、もしかして、まだ何か隠してるんじゃないでしょうね？」

「隠してるっていうか、……勝手に絵描いちゃったこと、もう怒ってない？」

「え？ なにそれ？ わたしそんなことで一回も怒ってないよ？」

「へっ？ でもさっき職員室で……」

「あれはあなたが人の顔見ていきなり逃げだそうとするからでしょ。ほんと失礼しちゃうわね」

「それは——」

「もしかして、勝手に絵のモデルにされて、わたしが怒ってると思ってたの？」

「……うん」

なんだ。

「昨日も言ったけど、わたし、そっちは全然怒ってないよ。びっくりはしたけど、あんなに上手く描いてあるんだもん。むしろ感心しちゃったくらい」

「——ほんと？」

「ほんと」

わたしが言うと、玉置はパあっと、顔を明るくした、と思ったら、またすぐに神妙な顔つきに戻った。

「でもゴメン。やっぱなにも言わずに未佑のこと描いてたの悪いと思うから。ごめんなさい」

そうやって、今度は深々と頭を下げられた。

それに少し驚いたけど。

部長が言っていたことを思い出して、改めて納得する。

いい子、ね。

「いいよ。うん。わたしこそ、さっきはお芋ぶつけちゃってゴメンね」

「ううん。それこそ全然。あたし、丈夫だから」

「うん。でも、もうあんな茂みに隠れてるのとかやめてよね？ せつかくのお肌なのに虫とか刺されちゃうから」

「……はい」

そうしてまた肩をすばめた様子に、

「わたしのこと描きたいんだったら、ちゃんとここに來たらいいいから。ね？」

もう一度、今度は優しく、そのつやつやほっぺをつまむ。

「まあ、わたしのこと、また描きたいって思ってくれてれば、だけど」

「~~~~~、描きたいっ！」

わ。
いきなり立ち上がったと思ったら、玉置はいつの間にかイキイキとした顔つきに戻っていた。

「描いていいんだよね！ 描きたいっ！ 描かせて！」

抱えてたスケッチブックを開いて、ポケットから鉛筆を取り出す動作も軽やかで、さっきまで落ち込んだのがウソみたいで。

その変わり身の早さに、今度はわたしがたじろいでしまう。

「え、今から……？」

「——ダメ？」

う、またそんな上目遣いで見つめられてしまうと、

「さすがに今からだと、お夕飯の用意もあるし……」

ぐー

わたしが「お夕飯」って口にした途端、玉置のほうからお腹の鳴る音。

……はあ。

「しょうがない。じゃあ、ちょっとだけ待ってて」

家庭科教室の後ろには、調理実習のときなんか材料を入れておく大きめの冷蔵庫があつて、普段はお料理研が使わせてもらっている。そこからわたしはあるものを取り出した。

そこらわたしはあるものを取り出した。

「それっ、もしかして昨日の？」

「うん。さすがにお芋は日持ちしないから、今日には持つて帰ろうと思つてただけ」

でも、そのタッパーをわたしはレンジに入れて、

「でもやっぱり、玉置に食べてもらいたくなつて。昨日はそのつもりで持ち歩いてたんだし。けど、いい？ 今日ちゃんと感想まで聞かせてもらうからね」

言つてるうちに温めはすぐに終わつて。

席に戻ると、玉置はすでにスケッチブックに向かって鉛筆を走らせ始めていた。

横から覗くと、すごい速さでわたしの表情が紙の上に浮かび上がってくる。

やっぱり、すごい。

部長や、美術科の子たちが言つてたとおり、玉置つてほんとに天才なんだ。

でも、

「姫路さーん。……玉置いー」

集中しているのか、声をかけても反応がない。

こっちを見ようもしないし。

というか、見なくても描けるんなら、わざわざここで、描かなくてもいいんじゃないかな。

はあ、

「しょうがないわね」

わたしはおはしでおジャガを一つつまむと、それを玉置の口元までそっと運んだ。

「はい。あーん」

………ぱく。

あ、食べた。

「……」

でも、手は全然止まってないし。

こっちを見てもくれないし。

「じゃあ、はい。もう一個、あーん」

ぱく。

……なんか、コレおもしろいかも。

口をもごもごさせるたびに、口元がちよっと上がっていて、あ、いまおいしいって思ってくれてるんだって、なんとなくわかる。

それはちよっと、満足。

「はい、あーん」

ぱ、

「あ、やっと気づいた」

そしてようやく、こっちを見たと思ったら、口を開いたまま目をまん丸にして、

「え、なに!？」

いきなりスケッチブックのページをめくったと思ったら、さっきよりもすごい勢いで、鉛筆を動かした。

ただ、さっきと違って、今度はわたしから目をほとんどそらさないで、手元を見ず空で描いていく。

そして、

「あーん」

描きながら、口を開ける。

それってやっぱり、食べさせろってこと？

「あーん」

「はいはい、しょうがないわね」

お望みのとおり、口元までお芋を運ぶ。

ぱく。

「はい」

ぱく。

「はい」

ぱく。

「はい」

ぱく。

「はい」

ぱく。

.....

タッパーの中身はだんだんと減って、紙の上に浮かび上がってきたのは、お箸でお芋を差し出しているわたしの姿。

そうしてお芋が全部なくなる頃には、玉置もまた絵の方に集中し出して、顔をスケッチブックに向けたまま、わたしの声も再び聞こえてないふう。

わたしは、そんな玉置を向かいの席から頬杖ついて眺めてる。

絵を描いてるときの玉置は、普段の子供っぽい感じが消えて、真剣な表情で。

それが、思わず見惚れてしまうくらいサマになってるんだけど。

でも、それがなんだか微笑ましくもあって。

放課後の家庭科教室がゆっくり夕闇に染まっていく中。

帰って夕飯の用意もしないといけないけど。

もう少しだけ付き合ってあげようかな、なんて。そういうちょっと上から目線な言い訳で。

もう少しだけ、こうして眺めていたくなったのでした。

「姫路のヤツ、今日は珍しく時間ぎりぎりまで描いてんなーとか思ってたら」

「ですよね。そんなのって、初めてじゃないですか。私、嬉しくって」
放課後の職員室。

眼鏡の教師に、玉置の担任、夢ちゃん先生こと、夢村ちひろは目を細めて同意した。

「まあ……中身はちょっとアレでしたけど……」

「いいじゃねーの？ 私的にはじゅうぶん有り。いいリアクションまで拝ませてもらったし」

そういつて、眼鏡教師は人の悪い笑みを浮かべ、ちひろは少し困っ

た顔をする。

「……ただ、だ」

そう言つて、眼鏡教師が手に取っているのは、今日玉置が提出した課題の一つ。ちひろが担当している絵画の課題だ。

「思つてたとおり。あいつ、これまで手え抜いてやがった。本気出せばこんな良いもん描くくせによ」

本人にデコピンするみたいに、開いたページを指で弾く。

それにちひろは苦笑しながら付け足した。

「今日出したばかりの課題で、別に提出は来週まででよかったんですけどね」

今開かれているページに描かれているのは、タッバーを片手に持った少女が、もう片方の手をこちらへと差し出している、という場面。

ただ、逆光が入っていて、少女の顔はほとんど判別不可能な状態だ。

なのに、だ。知っている者見れば、これがあの『笹川未佑』なのだとすうっと理解させられてしまう感じがあるというか。

別段、顔以外で何か特徴的に描かれているわけでもない。

それなのに。見た瞬間に未佑だと分かってしまえる雰囲気がこの絵にはある。

その証拠に、偶然通りかかった笹川の担任の間口も、

「ああそれ、うちの笹川ですね」

と、即座に言つて見せた。

それが原因で、今日彼女を呼び出すことになった訳なんだけれど。

「でも、私的にはやっぱりこの表情、ですね」

今日初めて未佑を見たちひろには、描かれている少女が誰かは当然わからなかったのだけど。けれど、この絵を初めて見たとき、逆光の中、見えないはずのその表情が、優しい顔でほえんでいる様子なのが、ありありと想像できて。

教師として、というより、担任として。

クラスでも浮いているあの姫路玉置にも、こんな顔で接してくれる友人がいるということが、ちひろにとっては一番喜ばしいことだった。

「それで結局、コレってテーマなんなの？」

「テーマですか？」

眼鏡教師の質問に、ふふっと、ちひろは得意げにほほえんだ。

「それ、返してもらつてもいいですか？」

眼鏡教師からスケッチブックを受け取ったちひろは、そこに描かれている絵を一つ一つ、愛おしそうに眺めていく。

一般的に、絵を描く際のモチベーションは、そのモチーフによつて大きく左右されるものだ。

描き手に想い入れがあるものほど、その魅力を最大限に表現しようとして、自然と力が入ってくる。

それは、入学したての一年生なら尚更のはずで。

だから、基礎の繰り返しに飽きてくる今の頃合いを見計らつて、今

回はありふれているけど、生徒たちにとってやりがいのあるテーマを設定してみたのだ。

それが、玉置については大成功したということだろう。

そのテーマとは、

『わたしの大好きなひと』です」

夕暮れの家庭科教室でスケッチブックに向かう玉置を見つめていたら、ふいにちよつと前の記憶がよみがえってきた。

あれは、わたしがこの町に越してきて少ししてくらいのこと。

わたしはこれまでずっと、長野の山村にある母方の実家で暮らしてきた。

母はいわゆるキャリアウーマンで、父はわたしが小さいときに亡くなつてたから、忙しい母に代わって祖母と叔母がわたしをここまで育ててくれた。

だけど、物心ついたところから、わたしも何か大好きな母の役に立ち

たいって想いずっとがあつて。

そのためにお料理や家事を祖母たちから教わってきたし、勉強も頑張つて母の家の近くの学校の入試だって合格した。

そして念願叶つて今年から再び母と一緒に暮らし始めたのだ。

はじめは村の外の暮らしに慣れるだけ精一杯だったけど。

それにも少しずつ慣れ始めた頃。

わたしがこの町に来て、二週間目。ちょうど入学式の前日。

わたしはこの町に来て、初めて美容室に出かけた。

村にいた頃は、田舎だったし、近くにある美容室は昔ながらのおじいちゃんおばあちゃんがやつてるような店だけだったから。

ほとんど生まれて初めての町のオシャレな美容室というものに、わたしは朝から変な緊張してしまっていた。

店は母がいつも行つてるところらしくて、予約も母が入れてくれた。

予約の時間は四時。

その時間の一〇分前に店に到着したわたしは、恐る恐る中を覗いていた。

町の中心から少し外れた道沿いの店は、周りの閑静な感じにとけ込むような白い壁の洋風なお店で、最初見たときは喫茶店かなにかかと思つてしまったくらい。

店の前面がガラスになっていて、大部分は曇りになってたけど、隙間から中をうかがうことができた。

……というか、これわたしすごく怪しい。

でも、予約時間までまだ少しあるし、お客さんは少ないみたいだけど、中で待たないといけなくなったら、待ってる間は、すごく気まづくなる気がする……。

うゝ。

行ったことないけど、歯医者さん行くのってこんな感じなのかな……。

うゝ。

そんなふうにお店の前で入るに入れずグズグズしていたら、

カランカランカラン

乾いたベルの音と一緒に、すぐそばにあった入り口のドアが中から開いた。

出てきたのは、ちょうどわたしと同年くらいの女の子。

白いニットのタートルに、黒の細めのパンツを合わせただけのシンプルな格好だけど、すっきり整った小顔のせいか、まるで外国のモデルさんみたいなスマートな着こなしって感じ。

『外国の』って思ったのは、多分、その髪の毛のせい。

長くて全体に緩くくせのついた、明るい色の髪。

その子は、まだわたしには気づいていないみたいで。店の入り口で

立ち止まって、前髪をちょいちょい摘んでみたり、後ろ髪を一房持ち上げて、自分の目の前でじいーと、目をまん丸にして見つめたりしている。

わたしはすっかり気を抜かれてしまって、ぼおっとその子に見とれてしまっていたんだけど。

「なに？」

「……え？ あつ、ううん、ごめんなさいっ、ジロジロ見ちゃって！」

わたしは、自分がまだ店の中を覗くような格好でいたことを思い出して、慌てて窓から離れた。

（うう、大丈夫かな？ 怪しまれてない？ わたし、怪しくない？ 明らかに怪しいよね……）

それをなんとかごまかそうと、

「ただ、かわいいなって、思っ、見とれちゃって！」

うわーっ、初めて会った子に何言っちゃってるの、わたし！

たしかに思ったけどっ、そんな恥ずかしいこといきなり口にするなんて、わあーっ。

思わず心の中では顔を覆って、表面上は冷や汗タラタラで固まってしまってたなら、

「でしよっ！」

なぜかその子はさっきまでのアンニュイな様子から一変。いきなり子供っぽい得意げな満面の笑みを浮かべた。

「……へ？」

そして、思わず呆然とするわたしに背を向け、軽快な足取りで店を後にしたのでした。

「なんだったの……」

「——ぶっ」

気づいたら、お店の人らしい女の人がドアから顔を覗かせていた。もしかしてさっきまでわたしが覗いてたのに気づいてて笑われちゃったのかもしれないと、一瞬で首筋が真っ赤になったけど、

「さっきまであの子、すごい不安そうにしてたのよ？」

「え？」

あ、笑われたのわたしじゃないんだ。

「いらつしやい。笹川さんトコの娘さんよね？ お母さんそっくり」

「あ、はい。よろしくおねがいますっ」

ぺこりと頭を下げた。

よかった。なんかさっきの子のおかげで、いつの間にか緊張してたのもどこかに行っちゃったみたいだし。

これなら、大丈夫そう。

そう思った矢先、

「これから、予約の時間より早く来ても中で待っていてくれたらいいからね？」

わたしは今度こそ、両手で顔を覆ってしまいました。

「あれ、玉置だったんだ……」

夕暮れの家庭科教室で眺め続けた。

結局、玉置が絵を描き終えるよりも先に下校時間が来てしまった。

玉置の家はわたしの家とちょうど反対方向らしくて、一緒に帰れるのは校門まで。

今は、グラウンドと体育館の間の目抜き通りを校門に向かって歩いている。

「それで結局、玉置が入学式でやらかしたことって一体なんだったの？」

「え？ ああ。うん」

「なに？ 言いたくないようなこと？」

「いや、そうじゃないんだけど。あたし的には何もやらかしたつもりはないっていうか」

「？」

「単に、ちょっとオシャレにキメて入学式に出ようとしたら、生徒指導の間口に見つかったやつてさ。入学式の間中、ずっとお説教。それでやっと解放してもらえたと思ったら、入学式終わってるし、クラスメイトはあたしのこと不良呼ばわりしてるしで、もう散々」

「そう、なんだ……」

なんとなくわかってきたけど、別にこの子に悪気があるとかじゃなくて、単に考えが甘すぎるだけで、多分、玉置にとって入学式にオシャレして出るのはきつとわたしが制服をきっちり着ようと思うのと同じようなものだったんじゃないかなあ、と……。

そのオシャレがどの程度のものか、わたし見てないから良いか悪いかは言えないんだけど……。

でもね、玉置。

それ、じゅうぶん『やらかした』うちに入るから。

「しかも、間口ったらそれからもちよこあたしの服装に指図してくるし。ちなみに、この格好が、アイツが許してくれる最低限のオシャレ」

「へえ……」

玉置の今の格好って言うと、制服はちゃんと着てるし、お化粧とかも特にしてないみたいだけど……あ、胸にニコちゃんバッジが一個付いてる。

よく見たら、タイピンの代わりに白い羽のヘアピンになってて、なんかかわいい。わたしもやってみたいけど、普通科はリボンだしなあ。

あとは……

どうしても目が向いちゃうのは、やっぱり髪、よね。

確か、髪を染めるのは校則で禁止のはずなんだけど……。

そういえば、玉置は地毛って言い張ってるって、美術科の子が言ってたなあ……。

「未佑？」

「あ、ううん。……そのタイピンしてるの、かわいいな、って」

「うんっ！ これ、この間駅前で買って買ったんだ！」

でもそんなふうに、わたしが「かわいい」って言うただけで目をキラキラさせてくれる玉置を見てたら、玉置の髪が校則違反かどうかなんてだんだんどうでもよくなってきた。

まあ、いまの髪は玉置によく似合ってるし。

間口先生もOKしたんなら、いいんじゃないかな、なんて。ちなみに、

「間口先生、うちの担任だよ？」

つて教えたら、案の定、玉置はものすんごく嫌そうな顔をしたのでした。

*
*
*